

佐貴和也先生 1年間の研修を終えての感想文

2026年3月13日

2025 年度で内科専攻医 3 年目になる佐貴 和也と申します。1 年目は医局に所属している産業医科大学病院で糖尿病・内分泌内科として研修をおこない、2 年目は兵庫県の市中病院で総合内科として働いていました。3 年目に糖尿病・内分泌内科の専門医研修をすることとなった際、派遣先の候補が複数ありましたが、ご縁があつて琉球大学病院第二内科に派遣していただくこととなりました。山口県に生まれ、大学時代から初期研修までを福岡県で過ごすなど、これまで比較的近い地域で生活してきました。そのため、兵庫県から沖縄県までフェリーで 40 時間以上をかけて移動する引っ越しは、これまでにない大きな環境の変化として強く印象に残っており、不安を抱えながら移動したことを今でも覚えています。沖縄県に到着した時、数日前までいた神戸の海と全く色が違うことに衝撃を受け、ずいぶん遠い所まで来てしまったものだと思ったことを覚えています。

専攻医 1 年目は内分泌疾患を経験する機会が少なく、2 年目も総合内科として一般的な感染症や透析患者の診療が中心で、糖尿病・内分泌疾患を診る機会はほとんどありませんでした。そのため、3 年目の初めの時点では、糖尿病を除く内分泌疾患に関する基礎的な知識も十分とはいえ、ほぼ学び始めに近い状態でした。しかし、沖縄県の温暖な気候や温かい人々に支えられながら、指導医の先生方にさまざまなことを質問し、多くを学ぶことができました。

こちらの臨床現場で働いていて一番驚いたことに、非常に多彩な内分泌疾患が集まってくるという点が挙げられます。もちろん偶然もあるでしょうが隣神経内分泌腫瘍や褐色細胞腫、クッシング病など出身の産業医科大学病院であればそれぞれ年 1 例いるかどうか程度の稀な疾患をそれぞれ複数例みることが出来ました。特に褐色細胞腫は同年同様のペースで紹介されてくるとのことでしたので驚きです。これは沖縄県の診療体制上、内分泌疾患をみる市中病院があまりなく殆どの症例が大学病院に集まるためと思われる。

内分泌疾患は全体的に(未指摘のものも含め)比較的珍しい疾患が多いものの日本内分泌学会の認定教育施設は 2025 年 11 月時点で 400 施設以上と大学病院の数を大きく上回る数であり、全国的には大学病院以外でも普通に診られていると思われるので、これは他県の大学病院にはない環境だと思います。特に私の出身である産業医科大学病院では福岡県の大学病院が人口に比して多いためか内分泌疾患の症例が多くなかったため、この点は印象的でした。

第二内科にて週一回 web 上で行われる新入院カンファレンスでは自らが経験した症例を学会における「症例発表」の形式でパワーポイントにまとめ発表するという機会があります。この時に教授や学生との質疑応答があるため、このカンファレンスに向けて準備をすることで学会発表の練習、ひいては疾患に対する知識や深掘りをする好機となります。このカンファレンスには日常診療を見直し大学病院としての役割を再認識するうえで大きな意義があると考えます。臨床の現場では、どうしても目の前の診療を数多くこなすことに意識が向きがちです。特に私は昨年度まで多忙な市中病院で業務を行っていたため、その事を実感しています。しかし大学病院には、市中病院とは異なり、個々の疾患についていまだ十分に解明されていな

い領域に着目し、診療を通じてデータを蓄積していく使命があります。発表を意識して症例に向き合うことで、日常診療では必ずしも重視されにくい検査や病態の深掘りにも目が向き、結果として診療と研究の両面から大学病院としての役割を果たすことにつながる可能性があります。

特に代謝・内分泌領域では、複雑な病態生理に基づいて多彩な症状や所見を呈することが少なくありません。そのため、非典型的な症例や解釈に迷う症例に遭遇した際には機序に立ち返って考える姿勢が重要になります。こうした症例を整理し、発表を通して検討する過程は病態理解を深めるうえで有用であり、臨床医としての思考力を鍛えるよい訓練になると考えます。発表の頻度については持ち回りの先生の数で変動するものの、だいたい1-2ヶ月に一回程度の頻度で順番が回ってくるため、ほどよいペースで行うこととなります。

また、週一回行われるグループカンファレンスでは症例ごとにグループの先生から「通常の典型症例と異なる点」に関しての指摘をいただくことがあり、非典型例の宝庫である日常診療において、なにが典型的でなにが非典型的なのかを教えていただくことは、疾患ごとのゲシュタルト形成の進んでいない若手にとっては非常によい学びの機会となることうけあいです。

代謝・糖尿病領域では現在も新規治療薬の開発が活発に進んでおり、患者数が多いだけでなく、現役世代にも広く影響する疾患を多く含むことから社会的影響の大きい分野です。こうした背景を踏まえると、この領域は今後も臨床・研究の両面で重要性を増し、引き続き高い注目を集める分野であり続けると考えます。また、より高い専門性が求められる内分泌領域と診療ニーズの高い代謝・糖尿病領域の双方を学ぶことで幅広い視点を持って患者さん一人ひとりの病態に応じた診療を行える医師になりたいと私自身考えています。

また、私事で恐縮ですが、もともとは登山を趣味としており、山や森の中で過ごすことが好きで、これまで海に足を運ぶ機会はあまり多くありませんでした。しかし、沖縄県に来てから目にした海の美しさは、それまで抱いていた海の印象を大きく変えるものでした。透き通るような青さや場所や時間帯によってさまざまに表情を変える風景に強く感動し、沖縄での生活の中で海がとても身近な存在になりました。第二内科の医局がある12階から見える西海岸の景色はとても綺麗で忘れられない光景になると思います。その影響もあり、これまであまりしななかった離島への旅行やマリナクティビティにも自然と興味を持つようになり、実際に足を運んで楽しむ機会を得ました。離島では本島とはまた異なる ゆったりとした時間の流れや豊かな自然に触れることができ、普段の日常の中では得がたい貴重な経験になったと感じています。

このように今年度は仕事、プライベートともに充実させることができ相談しやすく経験の豊富な先生方とともに沖縄県環境ならではの豊富な症例を経験しながら学会発表の練習や症例の深掘りを行うことができ自覚できるほどスキルアップすることが出来たと感じています。最後になりますが益崎教授と琉球大学病院の第二内科の先生方、そしてこの大変貴重な機会をいただきました岡田先生をはじめとした産業医科大学第一内科の先生方に感謝申し上げます。

